

《一席》

はじめに

どうも皆さんこんにちは、今まで経験したことのないような状況になってきまして、生活自体もずいぶん気をつかって生活しておられると思います。そういう中で、ようこそおでかけくださって、腹を決めて仏教の勉強をしましょう、そういうことだと思えます。心から敬服いたします。

三月くらいから私もずっと休みで、公の東本願寺系統の別院、その他、南御堂あたりの講義もあるのですが、全部中止です。ですから初めてこれだけ休みました。最初はちよつと嬉しかったのですが、最近がちよつとしんどくなつてきて、弱つてきました。年のせいか、足腰がだいぶ弱つてきて、このお話をするとき立ってお話をするでしょう。だいた一時間半ですね。一月の間に二十日くらい話してましたから、この立っているだけでもずいぶん運動になっていたと思うのです。大学では私は外に出ることが多いものですから、教務が気を使って二日で組んでいましたから、七コマを二日ですべてやりましたので、三コマ、四コマです。三コマ一時間半ずつとしゃべりばなしです。そうして相当足腰を使っていたのだなあと、今になって実感します。皆さんカラオケに行つて四時間半一人で歌つてごらん、死ぬよ。まあまあそんなような体力を使っていたのだらうと、今になって、改めて思っています。

その間、せつかくだからと思つて、本を三冊仕上げました。一冊

は今、みなさんが手元に持つてくださっているものですが、これももととは、一昨年くらいでしたか、東本願寺に「同朋」という雑誌がありまして、その雑誌に毎月原稿用紙で十五枚ですけれども、連載をして、『教行信証』全体について書いたものです。丁度皆さん方くらいの対象の方を目安にして、わかるように一生懸命書いたつもりです。それにしても『教行信証』はやはり難しいですから、説明が分かるように書いたものを、今回少し筆を入れて、要らないところはとつて、必要なところを足して一冊の本にさせていただきました。

ここは、田畑先生がさつきおしゃつてくださったように、五年間で一応『教行信証』をお話しようということが目標ですので、わたしもそのつもりでお話をさせていただきます。そうすると、ずいぶん飛んで話をしていかななくてはならないことになると思います。その書物が十分に網羅しているわけではありませんが、しかしせつかくのコロナですから、間に何度も読んでいただく、もう皆さんお年ですから一回読んで覚えようとするのは無理です。何度も読んで、身にしみこむから、読んでいくと、それは今度は本物になります。頭で勉強することはたいしたことではない。身で覚えていくというか、身が覚えていく、それが本物になつていくひとつの条件です。

親鸞聖人は『教行信証』と和讃以外、ほとんどの著作は八十歳を過ぎてから書いています。この赤い聖典のものは全部八十歳過ぎです。この中にも八十歳を過ぎた方がおられると思いますが、とても書けないでしょう。だからよほど体力があつたとみなさんおっしゃるけれども、そうではない。あれはものすごく勉強しておられるのです。もう何も言わなくても体から出て来るほど、若いころから勉

強していますから、だから難しい經典も全部覚えていて。どの經典のどこにどんなことが書いてあるか覚えていて。全部わかる。だから八十歳を過ぎてもあれだけの著作ができたのです。それは覚えていてというよりも、体でよく知っている、そういう勉強の仕方なされてきたと最近つくづく思います。ですから何度も繰り返しお読みいただければと思います。

今、印刷屋に一冊入っているのは、高僧和讃の第三巻目です。印刷屋に入っていますから、もうしばらくすると出て来ると思います。もう一冊仕上げたのは安居の講本ですが、これは来年の安居の前にしか出ないと思います。ですから、それに合わせて講本にそうとう書き加えて、また厚い一冊にして、その頃にまたどこからか出そうと思っっています。いずれにしても、いつ死ぬかわからないと思っ腹を決めてやれることをやる、これしかないと思っっています。皆さんもせっかくのチャンスですから勉強していただいたらいかがでしょうか。死んでいけるものになるので、仏教の勉強をして悔いはないです。今こそ本当はやらなければいけない。もう弱っっていますから、コロナに罹ったら確実に死ぬと僕は思っっています。ですから、そんなつもりで毎日を過ごし、生きていくところですよ。

### 『教行信証』は本願の偈

教の巻は『大経』のお釈迦様と阿難との出会いのところの記述、それが内容になっています。ですから教の巻には願文は掲げられていません。

行の巻には第十七願 諸仏称名の願、これが標拳として掲げられています。

信の巻は第十八願 至心信樂の願、これが標拳として掲げられて

います。

証の巻は第十一願 必至滅度の願、これが掲げられています。真仏土の巻には光明無量の願 寿命無量の願が掲げられています。

化身土の巻には自力を表す第十九願 修諸功德の願と、第二十願 至心回向の願、これが掲げられています。

つまり『教行信証』は『大経』の出世本懐の願から始まって、全体が本願によってあらわされている。ですから簡単に言えば、『教行信証』は本願の偈だということが言えます。

親鸞聖人自身が、本願の教えによって死んで行けるまでになっで、救われていった。それは本願のはたらきによる。ですから、自分の全体を救ってくださった『大経』の本願の世界を、言葉を超えた世界だけでも、『教行信証』全体で公にしていきたい、これが親鸞聖人の大きな意図です。

その際に「経」という意味でいうと『大経』です。「行」という意味で言えば、他の仏教の資料や、それからたくさんの師家の努力、そういうものと全く異質、仏様の方から来てくださっている南無阿弥陀仏の行なのです。それを表しているのが諸仏称名の願です。だから行の巻は第十七の本願を標拳とします。

このように各巻が親鸞聖人が救われていった本願の世界です。それは仏様の世界ですから、もともとこれは凡夫が追求することができないような大きな世界です。ですから、それを言葉で言うということは大変申し訳ない、自分のような凡夫が果たし遂げられるような仕事ではない、だから『大経』とその念仏の教えを、体全体で生きてくださったインド・中国・日本の七祖の方々、そういう先輩の經典と先輩の方々の言葉を集めて「文類」として私の世界を表現していき

い、これが『教行信証』の大きな意図です。

わかりますね。しかし、それはなにも単なる学問として言っているのではなくて、親鸞聖人がどんなふうにも救われていったのか、救われた世界の表現です。逆に言えば、救われないこの世の生活というものが紙の裏表の様にきちつと備わっているのです。

### 宗教心

みなさん相当コロナでストレスが溜まっているのではないですか。顔を見たらわかります。もうほぼ寝そうな感じです。それは健康というものが大切です。これまでは健康ということがそれほどいわずとも維持されていた。犬を散歩に連れていったり、その辺を散歩して何とか努力してやってきたけれども、それが急に、いつどんな状況の中で死ぬかわからない状態になった。それは大変な状況ですね。

この娑婆を生きていくときには、まず健康でありたい。それから、金はないよりあった方がいい。これまで皆さんはお金で苦労してきたのではないですか。それから、男の人も女の人も社会に出れば、やはり自分をしっかり守っていかなくてはならない。だから、会社勤めなどをして、自分を何とかして守っていかうと頑張ってきた。

この世の中を生きていくときには、今、言ったように、健康であるとか、人間関係をよくしていこうとか、それから、少しでも楽に生きるためにお金を儲けたいとか、あるいは下で働くより上なつて力を持った方が楽だと、こんなことしか思い浮かばないわけです。どんなに考えても、そんなことしか思い浮かばないわけですね。

ところが、やはり「本当にそれだけでいいだろうか」という心が、

どなたの中にもあるわけです。まだ若い人はこれからだから……、若い人はこれからだから一生懸命頑張つてやったらいいと思えます。だけど私たちがくらいいの年になると、「少し疲れたなあ」と思う。「今まで何をやってきたのかなあ」、「このまま人生を終わつていつていいのだろうか」という気持ちですが、だれの中にも湧き上がってくるわけです。

政治や文化、その他、人間の営みのすべてが世間です。ところが、どうもよくわからないのですが、世間を超えた「いのち」と言ったらいいのか、この「身」と言ったらいいのか、頭で考えるよりもっと深いところから、どうも「本当にそれでいいのだろうか」「このまま死んでいつていいのだろうか」「今まで何をやってきたのだろうか」「これから、どうしたらいいのだろうか」そういう、何かよくわからないものが突き上げて来るわけです。それは世間のどんなものでも埋まらない。

そういう気持ち人間には生まれた時からあります。そして死ぬまであります。だけど、それがどこから来て、何なのか全く分かりません。だからいつも不安で、世間だけならまだ生きやすいのに、何かよくわからないものが下から突き上げてくる。これは一体なんなのか、お釈迦様は、それを解かなければ人生が完成しない、全うしないとと言われる。

私たちのいのちの深いところにある、まあ宗教心といつてもいい、そういうものを『大経』では「本願」として、「如来の本願」として説いてくださっているのです。

というように大まかな見当をお持ちいただければ、現実とそんなに離れたことを言っているのではない、ということが分かっていただけだと思います。

生死は南無阿弥陀仏の中にある

こちら側で、仏の教えを聞きながら、如来の本願を学び、一生懸命頑張るけれども、いつも自分を中心にして「いいか悪いか」、「勝つか負けるか」と考えている。この心は自力では絶対届かない。自力が届かない心です。やがて時期が熟して、人間は自力で解けないものを抱えているのだと知って、親鸞聖人のお言葉で申しあげますと「いずれの行もおよびがたき身なればとても地獄は一定すみかぞかし」と知って、そういう相対分別を破って、「我が名を称えて、我が国に帰れ」、初めて南無阿弥陀仏として聞こえてくる。

生きることも死ぬことも南無阿弥陀仏の中にある。

南無阿弥陀仏は、ですから光明無量、寿命無量です。

人間として死ぬのはだれでも嫌です。けれどもこれは縁があればしかたがない。生きることも死ぬことも、南無阿弥陀仏の、分別を超えた無量の寿の相である。

光明無量というのは、仏様の教えは「私たちの分別こそが地獄を作っている」と教えている。仏様の教えはずっと「いつも自分を立てて自分を譲らない根性、それが地獄を作っている」ということを教えている。けれども私たちはそう言われてもわからないから、「何を言っているのか、そんな馬鹿なことがあるものか」と思う。「地獄を作っているのはトランプと金正恩である」それはよくわかる。誰が「私が地獄を作っている」と思いますか。ところが、時期を経て、初めて五体投地して「そのとおりでした」といつて頭を下げたとき、この如来の本願が南無阿弥陀仏として我が身を貫くのです。

それを經典という意味からすると『大經』の他にはないのです。

大乘經典は『涅槃經』、『華嚴經』、『法華經』などたくさんの經典

があるけれども、仏様のいのちを仏様の方から説いているのは『大經』しかないのです。だから「大無量寿經、真実の教 浄土真宗」と、こういうふうの名のつて、そして「行」として言えば、南無阿弥陀仏しかない。頭で考えれば、たくさん宗教がありますから、私たちは、真宗だけではないキリスト教もあるではないか、イスラム教もあるではないかと思う。頭で考えればそうです。そうだけれども、それでは実際にやってごらんさい。

やはり先祖代々というか南無阿弥陀仏という教えに育てられてきているのです。

第十七願がそうでしょう。私たちに先立ってガンジス河の砂の数ほどの先輩たちが南無阿弥陀仏を称え、南無阿弥陀仏と生き、南無阿弥陀仏と死んでいった。そのばあちゃんの方にが見事だったというのがあるのです。じいちゃん、お父さん、お母さん、そういう人たちが、念仏の世界を私たちに伝えてくれた。縁あつて真宗だけれども、それをもとにして生死を超えるという、世を超える世界の生きていきたい、これが親鸞聖人です。頭で考えることはいろいろ出来ても、この身が持っている事実、それが大事です。

勝海舟のお父さんは勝小吉と言います。江戸の町で、旗本です。旗本というのは徳川直属ですから、小さくてもプライドがあります。だから、江戸ではちよつと大将としてがんばっていたはず。ところが勝海舟は若い頃からいろんな勉強をして、これから先は、徳川家ということをやっていただけでは話にならない、薩長がいうように、日本全体、あるいは世界というところに目を開かないといけない、ということをお父の勝小吉に言うのです。そうしたら小吉が「お前、立派なことを言うね、しかしお前は幕府の米で育つたのだから。」

徳川家の米で育ったのだろう。それをはずすことはできない」と言う。考えるということは何でも考えられる。しかし、身は徳川の米で育っているのです。それが彼から抜けないのです、だからずっと最後まで幕臣として対応した。だからお父さんは偉かったと思う。これは事実です。

私たちもそうです。皆さんもそうです。たまたま真宗のご門徒に生まれた。しかしそこでいただいた教え、これを精一杯尋ねていきたい。これが親鸞聖人です。親鸞聖人だつて平安の末期ですから、もともとは天台宗です。だから『大経』や『法華経』をだいぶ勉強したのでしょう。けれども最後には「念仏ひとつ」だと。念仏以外に仏教はありません。あつても観念です。念仏だけはちゃんと伝わっています。聖徳太子は立派でしたけれども、聖徳太子でも念仏を称えていました。そうでなければ日本に念仏は広がらなかった。念仏だけが仏教を事実にしていく法なのです、と宣言したのは法然と親鸞でした。

だから『教行信証』全体は本願が柱になっている。それはそうです、しかし本願の成就というところに立って南無阿弥陀仏に帰依し、初めて無量のいのちというものに立てた。そして「人間の分別というものが地獄を作ってきた」ということを初めて教えられた。だから無量寿・無量光、帰命無量寿如来、南無不可思議光、こう言つて本願が成就したのだ。それによつて初めて人は救われていく、初めて自分の人生が完成していく。全うしていく。わかりますね。

そういう気持ちを込めて『教行信証』をお書きになつていくことがわかります。『教行信証』というものはすごいものです。

親鸞という人は天才です。そう思います。

## 総序 別序 後序

今日から、皆さんと一緒に『教行信証』の総序に入つていきたいと思います。総序は、皆さん、覚えておられますか。「竊かに以みれば、難思の弘誓は難度海を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破する恵日なり」という素晴らしい文章ではじまります。『教行信証』の一番初めに「顕浄土真実教行証文類序」というように、この総序には親鸞聖人がちゃんと「序」と書いています。ですから、これは『教行信証』全体の序であるというので、普通「総序」と呼んでいます。

それに対して信の巻に、改めて「序」が書かれます。聖典（東本願寺）で申しあげますと、二百十頁になります。ここに「顕浄土真実信文類序」というのがあります。ここも親鸞聖人が「序」と名乗つておられる。これを「総」「別」といいます。「総序」に対して、信の巻は「別序」と普通は言われます。この二つは親鸞聖人がちゃんとご自分で「序」と名乗つておられます。だから、ここには自分のお名前が「愚禿釈親鸞」とフルネームで出てきます。

ところが『教行信証』の最後、化身土の巻になりますと、内容は明らかに「序」だと思われるのですが、（聖典ですと三百九十八頁）「竊かに以みれば、聖道の諸教は行証久しく廃れ、浄土の真宗は証道いま盛りなり」というように「竊かに以みれば」と、これは「総序」と対になっていると言われます。この内容を読むと明らかに「序」だと思われるのですが、なぜかここには「序」という字がないのです。

ですからこれは化身土の巻の内容なのか、それとも「序」なのか、あるいは化身土の課題がずっと流れているけれども、あえて「序」と書かなかつたのか、いずれにしてもここは「序」と名のつておりません。しかし、内容は「序」ですので、普通「後序」と呼びます。

なぜ『教行信証』の後序は「後序」と名乗らなかつたのかについて

は、いろいろと考えられますので、これからお話をしていく中で申しあげられるかもしれません。いずれにしても『教行信証』においては、総序、別序、後序の三つ序があつて、総序と別序は親鸞聖人が「序」と書いていますから公式の「序」であります。

#### 総序―帰命と願生

そういう意味で、この「総序」というところは『教行信証』全体をまとめる、あるいは『教行信証』全体がこれから始まつていきますよという、たいへん大事なところですよ。ですから『教行信証』全体を踏まえてこの文章が書かれていますので、本来はこれは『教行信証』を全部読んで「なるほどなあ」とわかるくらいの文章ですよ。けれども、それはもう無理ですから、今回皆さんと一緒に少しずつ本文を読みながら、ここにどういふことをお書きになつてゐるか、これはどういふ意味かということ、少しずつお話をしていこうかと思ひます。よろしいですか。

実は、あちこちで『教行信証』をお話してしまつて、この総序に時間を取りすぎまして、ずいぶんお叱りを受けました。つまり一生懸命に話をしていきますと、「これは信の巻このなのです」とか、「これは化身土の巻のここを言つてゐるのです」と、今度はそつちを話して始めてきりがないのです。ここは五年間ということがありますので、そのところは少し控えながら、しかし、きちつと読んでいけたらと思ひます。まず、皆さんと一緒に読んでみましょう。

「竊かに以みれば、難思の弘誓は難度海を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破する恵日なり。しかればすなわち、浄邦縁熟して、調達、闇世をして逆害を興ぜしむ。浄業機彰れて、釈迦、韋提をして

安養を選ばしめたまへり。これすなわち権化の仁、斉しく苦悩の群萌を救済し、世雄の悲、正しく逆謗闡提を恵まんと欲す。かるがゆえに知りぬ。円融至徳の嘉号は、悪を転じて徳を成す正智、難信金剛の信樂は、疑いを除き証を獲しむる真理なりと。しかれば、凡小修し易き真教、愚鈍往き易き捷徑なり。大聖一代の教、この徳海にしくなし。穢を捨て浄を欣い、行に迷い信に惑い、心昏く識寡なく、悪重く障多きもの、特に如来の発遣を仰ぎ、必ず最勝の直道に帰して、専らこの行に奉え、ただこの信を崇めよ。

ああ、弘誓の強縁、多生にも値いがたく、真実の浄信、億劫にも獲がたし。たまたま行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ。もしまたこのたび疑網に覆蔽せられば、かえつてまた曠劫を徑歴せん。誠なるかなや、撰取不捨の真言、超世希有の正法、聞思して遅慮することなかれ。ここに愚禿積の親鸞、慶ばしいかな、西蕃・月支の聖典、東夏・日域の師積、遇いがたくして今遇うことを得たり。聞きがたくしてすでに聞くことを得たり。真宗の教行証を敬信して、特に如来の恩徳の深きことを知りぬ。ここをもつて、聞くとお慶び、獲るところを嘆ずるなりと」

これだけが「総序」と言われる文章です。見事な文章ですね。まあ素晴らしい文章に思ひますが、これまでの参考書ですと、ここを五か所、あるいは六か所に切つて、そしてそれぞれのところを解説していくという形をとつていますが、これみなさんお読みになつてすぐにわかるのは、大きく二つにわかれることです。

前半は「特に如来の発遣を仰ぎ、必ず最勝の直道に帰して、専らこの行に奉え、ただこの信を崇めよ」ここまでです。これは当然、行信に帰する。

世親の『願生偈』は、「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来 願生安樂国」と、「一心帰命」と「願生」と、二つにわけて信心が証明されています。なぜかというところ『大経』の下巻が、「一心帰命」を表している部分と、「一心願生」を表している部分と、二つに分かれているからです。

世親菩薩は菩薩として『大経』の論述を書いたのですが、『大経』の教えの通りに、信心を「一心帰命」と「一心願生」、「一心」はどっちにもかかります、帰命と願生、と表明したのです。

この総序はその通りになっています。親鸞聖人は素晴らしい。「専らこの行に奉え、ただこの信を崇めよ」

行信に帰命せよーここまでが「一心帰命」です。

親鸞聖人は「一心帰命」というふうに最初に表明します。

#### 願生浄土の生活

そしてその帰命した信心をこの世で生きていく。「一心願生」する。

いくら仏教が分かったとしても、この身がこの世のものですから、身が習い覚えているのです。金の計算をしたり、地位の事を考えたり、人間関係で悩んだりする。仏教がせっかく分かったのだから、そんなことを超えて生きたいと思うけれども、そうならない。その時に浄土の莊嚴があらためて意味を持つてくる。

コロナでテレビを見ていると食い物ばかりです。なにかしらんけれども、楽しみは食うことしかないのでしょうか。やはり、あれでよくわかりました。自分の勝手なことばかり申し上げますが、自分の息子が京都でミシュランの星を取ったところのシェフで、この前

テレビに出たのです。もう何回も出ているのですが、最初の時にパスタを作って、テレビに出たのだからと言って、五百だけ限定で受け付けたら、なんと三千四百、注文が来たのだそうです。「お父さん、僕死ぬわ」と言つて、毎日毎日仕事を終わってパスタ作りましたら一か月かかりました。そんなにみんな申し込むのです。そんなことをして恥ずかしいとは思わないのですね。

ところが浄土には食功德、食べることを書いているところがある。仏教を勉強することが「食」なのです。「禅三昧為食（禅三昧を食とする）」。そこに「物」を食うとは書いてない、「仏教」を自分のいのちの糧にする。そこには、「本願」を我が命とする、と書いてある。「食」ということを本当に考えるならば、如来の本願、そこまで考えなさいよと。今まで三千四百もパスタを作つて、それを送つて、それを食べて、どんどん太つて、命が短くなる、それが恥ずかしいと少しは思え、と。普通の常識では恥ずかしいと思えません。

仏教の浄土の莊嚴を読んでいると何を言っているのかわからない。「仏教を勉強して命がなくなるか」と思うけれども、「最小限の貧しい質素な生活をしながら、本願に乗ずるをわが命とする」と食功德のところを書いてあります。本当のいのちの糧は本願なのです。「なるほどそうか、自分のいのちは本願のいのちとするのだ」、そう思う。そんなふうには浄土の莊嚴は一つ一つ私たちの生活を照らしている。そして反省を促す。そして「あ、そうだ、仏教に向わなくてはいけないのだ」と、私たちが仏教に向かわせる。立ち返らせて下さる。それが浄土の莊嚴なのです。

ですから「帰命」と言つて、仏様に帰命した人は、今度は浄土があらためて意義をもつて、それを生きていくときに、「恥ずかしい生き

方をしている、申し訳ないなあ」と思いながら、浄土に帰る者になつていく。こういうふうにあらためて仏教に立ち返らせていただくはたらき、これが「願生浄土」です。

私たちのごさかしい根性や、自分だけを立たいという根性を越えて、「みんなと共に生きていく」という世界を、何とかして生きていこうと、私たちを立ち返らせてくれる。そこに「願生浄土」という大事な意味があるのです。

#### 一心願生

次に、「ああ、弘誓の強縁」「ああ」とは何か。親鸞聖人のような方が「ああ」なんて言うのはここだけです。こういう感動の言葉を使いながら、「ああ、弘誓の強縁は 多少にも値いがたく」私のような恥ずかしい凡夫としての生き方をしている者から考えると、本願に遇うなんていうのは、よくも遇えたことです。本来遇えないものがよくも遇えたことです。それは一重にお釈迦様と法然上人のおかげです。

「真実の浄信、億劫にも獲がたし」信心なんて、私たちの中に本来ない。南無阿弥陀仏を信じる、そんな心なんて絶対ない。金を信じたり、地位を信じたりしている。人を信じたりして裏切られますが、戸籍のない仏様を信じる、そのようなものが、私の心の中に初めて、南無阿弥陀仏として起こってきた。たまたま先生と遇って行信を頂けば、私の努力とか、私の能力とか、私がすぐれているとか、そんなことではなくて、ずっと昔に仏さんに遇うような宿縁をいただいていたのです。こうやって自分の力をすべて捨ててしまつて、仏様のご縁よつてわたしのようなのが仏教に遇えたのです。

「もしまたこのたび疑網に覆弊せられれば」、生活は仏教に遇えた

かもしれないが、凡夫ですから、世間のことに迷わされて、南無阿弥陀仏を疑う、そういう心に覆われてしまったならば、永遠に地獄を出ることはできない、仏様の世界に行くことはできない。だから南無阿弥陀仏の名号と信心、教えを聞思して後ろに退いてはいけませんよ、

「撰取不捨の真言」これは『観経』の救いの言葉、

「超世稀有の正法」これは『大経』の救いを表す言葉、

こんなふうには「ああ、弘誓の強縁」から「一心願生」をあらわしている。

参考書などでそんなことを言っている人はおりませんが、『教行信証』をよく読むと『大経』の通り書いてあります。親鸞聖人はご自分の操作をしていない。

だから『大経』のように、世親が言つたように、「行信をあがめよ」という「帰命」と、本願がどれほどありがたいか、しかしいつも疑いばかりがあつてどうにもならないと嘆く、「願生」。この二つに大きくわかるように思います。そこでひとつ区切つて、前半と後半という形でこれから読んでいこうと思います。

#### 竊かに以みれば―親鸞聖人の態度表明

ところで皆さん、もう覚えておられる方も多いでしょう。本山の安居の開講式の時に、本講を受け持つ先生が宗祖の前に出て行つて、仰々しく巻物をもつてきて、それを開いて読むのです、それが総序です。

「竊かに以みれば、難思の弘誓は難度海を度する大船」みんな手が震えながら読むのです。あれは年のせいかもしれません。震えながら読んでいますが、なかなかいいものです。読む方も訳が分からず



感動するのです。何か涙が出て来るようです。宗祖はじつと座つて上から見ているでしょう。その前で「竊かに以みれば」言うだけで感動して涙が出て来るような感じがします。

この「竊かに以みれば」という言葉は独特の言葉で、先ほど、皆さんと読みました後序も「竊かにおもんみれば」で始まります。

この「竊」という字は、あんまりいい字ではありません。古い字を書いています。これは窃盗の「窃」です。「窃」の古い字です。ですから「ぬすむ」という意味があります。少しぬすむ、ここに親鸞聖人の、愚禿積親鸞と名乗った方の、謙虚さがあるのです。

凡夫も本願に救われていったのだ。けれども凡夫だから、救われた感動などというものはあてならない。この場にもそんな感動を持った方がいらつしやるのではないですか。昔、救われた時に感動したけれども体験は消えていく。もう忘れた。だから親鸞聖人は信心をいただいたと言つても、ほんのちよつと垣間見ただけで、私から自分との感動を述べるようなそんなものではありません。ですから『教行信証』は文類にしたのです。自分の言葉で言っているわけではないのです。

この言葉をよく使われた方は中国の善導大師です。皆さんご存知ですね。善導大師は『観経』の教学を大成した方です。ですから凡夫の自覚、機の自覚、人間の方から手出しできない仏様の本願に救われていくのだと言つて、機の自覚に徹底した方です。その善導大師が『観経疏』あるいは『法事讚』の中でこの言葉を使つておられる。

『観経疏』の文章を読みましようか。

書けばいいのですが、じっくり読みます。よく聴いてください。

「竊かにおもんみれば真如広大なり」

ひそかにおもんみれば、仏様の真如という世界は大きくて広くて、私たちの思いの及ぶものではない。

「五乗もそのほつりを覚らず」

五乗というのは、声聞・縁覚・菩薩で三乗です。それに人間、天の二つを加える。つまり私たちの優れた人たちが、いくら考えてもわからない世界が、真如の広大という仏様の世界なのだ。

そこに「竊におもんみれば真如広大なり、五乗もそのほつりを覚らず」こういう言葉があります。

竊におもんみれば仏様の真如の世界は広く大きな世界である。五乗もそのほつりをはからず、声聞 縁覚 菩薩というような人、それから人間の中の優れた人、一切の人も仏様の世界をはかることができないほど、仏様の世界は分別を超えて大きくて広大な世界なのです。その時に「竊におもんみれば」を使います。

「まことに申し訳ないけれども、ほんの少しだけ仏様の世界を申し上げれば」、こういう謙讓語、へりくだつて言う言葉、わかりますね。これを親鸞聖人も採用しているのです。ですから実に謙虚な、素朴なことになります。自分の息子を「愚息です」と言つたり、奥さんに怒られるから言いませんけれども「愚妻」とへりくだつて申し上げることは、そういうことだということを知つておいてください。序は「竊におもんみれば」で始まります。

それに対して「本文」の方は、例えば「教の巻」ですと、「謹んで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり」から始まります。「謹・案」謹んで案ずる、あるいは同じ意味ですけれども、「謹・頌」謹んで頌す。

「謹・案」は、すぐにわかるとおり曇鸞大師の『論註』からとつています。『論註』の一番最初の出だしは、「謹んで龍樹菩薩の十住毘婆

沙論を案ずるに、いわく菩薩、阿鼻跋致を求むるに二種の道あり、一つには難行道 二つには易行道なり」とあります。ですから「謹んで案ずる」

「竊に」は「序」ですから、「これから『教行信証』を書いていきます」という親鸞聖人ご自身の態度表明と考えてもいい。どんな態度かという点、決して威張っているのではなく、私のような愚かなものだけど、仏様の世界を少しだけ感じて、それを公にさせていただきたいという非常に謙虚な態度表明なのです。それに対して、「本文」の方は『大経』によりながら本願の世界を堂々と説明していく。その時には曇鸞大師の『論註』により「謹・案」「謹・顕」これで統一します。これは親鸞聖人の『教行信証』の全体を貫いて言えることです。

ですから「序」は実に謙虚な親鸞聖人の態度表明から始まる。こういうふうな思ってください。

丁度時間となりました、ちよつと休憩しましょう。

## 《二席》

それでは、もうしばらくお話をさせていただきます。

### 難思の弘誓と無碍の光明

総序ですが、「竊におもんみれば」というのは、凡夫の態度表明。たいへん謙虚な言葉から始まるのですが、その次に続けられる言葉は、「難思の弘誓は難度海を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破する恵日なり」。こういう言葉で語られます。

「難思の弘誓」というのは、私たちの分別をはるかに超えた、阿弥陀如来の広い本願のはたらきは、生きていくことに苦しみ難渋する、この娑婆世界を救ってくださる大きな船である。仏様の本願は、生きることの難しいこの世の中を、大きな船のようなはたらきをして、かるやかに娑婆を生きさせてくださるものである。

もうひとつ、「無碍の光明」は、仏様の量ることのできない智慧の光は、「無明の闇」を破る。

私たちの「無明」というのは、言葉通りというと、真理を知らないということ。何が本当に真理かということが私たちにはわかりません。経験だけで正しいとか間違っているかを判断する。だから真理という点について私たちは全く無知である。真理を知らない自我の経験則だけで、正しいということを言いあつて喧嘩をしています。だから声が大きいほど勝つ、でかい声で喧嘩した方がいいかもしれない。

ひとつは光明無量、もうひとつは本願。分別を越えた一如の大きな本願のはたらきは、相対分別で苦しむこの世を超えさせてくださる大きな船である。この二つで表されます。こういうふうに親鸞聖人が述べられます。

これは実は阿弥陀如来そのものです。ですから親鸞聖人が帰依した阿弥陀如来のはたらきを、本願の寿命無量というはたらきと、智慧の光である光明無量というはたらきとの、二つのはたらきに分けて表していることとなります。

### 南無阿弥陀仏は信心として実現する

普通、「信心」というと、「何かを信じます」と言います。その時、信じるものは対象になる。対象になるということは、見る自分がい

るので、こつちも対象になつています。ところが他力の信心はそうではありません。見る自分が破られている。信じる対象が向こうにあるのではなくて、あえて言えば「南無阿弥陀仏は信心として実現する」。なかなかここは難しいところですが、しようがない。

他力の信心は、私たちのいのちの深いところから 頭が二つの、自分を立てた相対分別の世界を突き動かしてくる。それが「南無阿弥陀仏」として実現した時には、仏様の世界にいっぱい包まれていく。しかし、それまでは対象として「ある」として説かないとしようがない。だから、『観経』では一応「西の方に浄土がある」とか、「阿弥陀さんは西の方におる」というように、対象として説かれている。しかし、それは比喩なのです。

例えば『観経』ですと、韋提希が、「この世界でもう自分は生きていくことができない。息子は父親を殺すし、友達はみんなそそのかして、無茶苦茶になつています。この世の中は悪世だ。どうにもならない」と言つて泣き叫ぶのです。そうしたらお釈迦さんが「阿弥陀遠からず」と言う。分別が間に合わなくなつて、どうしたらいいかわからなくなつて泣いている人に「阿弥陀、ここを去ること遠からず」「そこに阿弥陀さんがいるのです」と説くわけです。しっかりと賢夫人、立派なお妃さんの時には、「西の方にある」、「十万億土のあなたにある」と説いていたけれども、もう世の中を棄てて、凡夫丸出しになつて泣いている時には、「阿弥陀如来はそこにいる」と説くのです。

阿弥陀如来も浄土も単なる場所、対象ではなくて、これは仏さんの世界を象徴しているのです。これは分別が破られて一如の世界に包まれたという感動が他力の信心、南無阿弥陀仏の信心です。だか

ら、その時には「信心そのものが如来だ」と言っているのです。

皆さん、阿弥陀に救われるのではないのです。信心が起こつたものは、起こつた信心に救われる。だから「この行につかえ、この信をあがめよ」自分に起こつた信心をあがめよ、これはおかしいでしょう普通だつたら。だけど自分のところに起こつてきた信心を頭を下げてあがめる。それは自分の分別を越えた仏様の心そのものが信心として起こつてきたからです。こう言っているのです。

こう言っているのですが、わかつてもらえないでしょう。証拠を言ひましょう。

### 三一問答―信心が如来

この「竊におもんみれば」のこの「竊」という字を『教行信証』の本文でもう一箇所、使っている所があるのです。しかもご自釈で。それは信の巻の「三一問答」という『教行信証』の中で一番大切な問答がおこる所、聖典二百二十五ページにあります。

三一問答の字訓釈が終わつて、仏意釈というのが始まる所、本当は三一問答を詳しくお話をしたいのですが、時間もありませんのでここでは簡単に言ひます。

三一問答とは何か、それは三一問答の始まるところに親鸞聖人がご自分でお書きになつていられるから、それを読んだ方が早い。

「問う、如来の本願、すでに至心・信樂・欲生の誓いを発したまえり」第十八願には「至心信樂欲生我國」、至心信樂して我が国に生まれんとおもえ、というふうに誓っている。それなのに「何をもつてのゆえに論主「一心」と言うや」

本願は「至心信樂欲生」と三心を誓っているのに、どうして世親菩薩は自分の信心を表明するときに「一心」と言うのか、どうして「三

心」と言わないのか。

三一問答の内容、わかりますね。

如来の本願の方は「至心に信樂して我が国に生まれんと欲え」と「三心」で誓っている。それなのに世親菩薩は、衆生の信心を表明するときに「世尊我一心」「一心」と信心を表明するのはなぜか、と問うている。この如来の本願の「三心」と、衆生の信心の「一心」とはどんな関係になっているのか、と問うのが三一問答です。わかりますね。

如来の本願は仏様の心です。衆生の信心は私たちの心です。ですから普通だったら、私たちの信心は信じる仏様を対象に考える。ところがこの三一問答を読みますと、実は、この一心と三心とは、「衆生の信心の一心と如来の本願の三心とは、イクオール、同じものなのです」ということを証明しているのが「三一問答」です。ですから「信心に救われる、信心が如来だ」と言っている。

普通、如来と衆生は別です。そして衆生が如来を信じると考えます。そうではなくて実は「信心が如来そのものなのです」というのが、親鸞の「三一問答」です。

他力の信心―凡夫のまま一如の世界に包まれる

三一問答の一番大切なところ、仏意釈に親鸞はちゃんと書いています。「仏意測り難し」、仏さんの心は私たちにはわからない。「しかしりといえども、竊かにこの心を推するに」、「この心」というのは「他力の信心」。「竊に今起こっている他力の信心を推測する」と書いてある。(僕は自分の解釈を言っていない、書いてある通りに言っている) そうすると三一問答で親鸞が言おうとするのは、私たちの普通の

分別ではとても考えられないような心が他力の信心です。普通は、何らかの対象を信じますと言うのですが、そういう心はコロコロ変わる。僕は、今まで、もう五十くらい結婚式に出ている。けれども「一生愛します」という言葉、あれは言わない方がいいと思う。半分くらいは離婚した。こんなことを言つてすみません。僕は三十二組の仲人をした。不思議だな、僕が仲人した夫婦は一組も別れていない。三十二組完璧。一番危ないのがうち、最近危ない。

対象として考える信心なんてコロコロいつでも変わる。

いいですか、はつきり言います。「他力の信心」というのは、「阿弥陀を信じる」というふうにはしか表現できない。けれども、阿弥陀の一如の世界に包まれているのです。僕らは「自我」を生きているからそれがわからない。「一如の世界、仏さんの世界に生きている」と言つても最後まで忘れていく。でも死ぬときにわかるから心配いらない。そろそろもう意識がなくなつて仏さんの世界に入りそうになつてくると、仏さんの世界になつてくる。

意識は「自分が正しい」と思っているから、「仏さんの世界はうそ」だと思ふ。だけど事実は仏さんの世界を生きているのです。いいことも悪いことも仏さんの世界の中で起こってきたことなのです、だから嫌だと思ふことも引き受けなければならぬ、今まで引き受けてきている。そして歳をとつてポロポロになつて来ている。それは全部仏さんの世界で起こつてきているのです。それを忘れて「私は」

「俺は」と言っているのです。だからこの世界は「くそ」と思ふけれども、実は初めから仏さんの一如の世界にあつたのです。生まれてきた時に自分の思いで生まれ

てきた人は一人もいません。だから死ぬときには、意識がなくなつ

て、「仏さんの世界に迎えに来る」と書いてある。人間がこっちから行くわけにはいかない、だけでも仏さんの世界の方から来るから、心配はいらない。臨終来迎、それはもとの一如の世界に帰るだけの話です。

その一如の世界に包まれていたのだということを、頭を下げて初めて分かる。それが「回心」です。その時に、凡夫のまま、一如の世界に包まれていたのだという大きな感動、それを「信心」という言葉で表すしかない。「阿弥陀を信じます」と言うしかない。

「阿弥陀を信じます」というように「信じる」と言うと、私たちは何かを信じるのだと考えるが、それは考えた信心であって、本当の信心はこのままで一如の世界にある。大きな世界に初めて目を開いた、その目を開いたところを聖道門では「覚る」という。ところが浄土門は凡夫のままだから覚るわけがない、凡夫のままでは一如の世界に包まれている。それが分かったことを「信心」という。だから、実は、一如の世界、仏さんの世界はひとつだから、信心そのものが如来なのです。

それが三二問答という所です。ここにはすごいことを書いています。「聖道門の人は良く聞きなさい」「もうちよつと頑張つて自力無効が分かるまでやりなさい」と親鸞聖人も言っている。自力で「頑張れば何とかなる」と思っているから一如の世界が分からないのです。その思いが破られて「自分の世界はない、もともと仏様の世界にあった」、そこに目覚めるのが信心なのです。

もともと信心と言つても、自分の心以上、仏様の心だから、だから「この行に奉え、この信を崇めよ」と言っている。自分の上に起

こつてきた信心の方が私よりずっと大きい。それを証明するのが三二問答です。

そこに、今、言つたように書いてある。「仏意測り難し、しかりといえども竊にこの心を推するに」と、信心そのものは、大きな本願のはたらきと、私の無明、分別を破る大きな太陽のような智慧のはたらき、それが私が帰依する如来です。

それは言葉を変えて言えば、「私の信心は如来そのものです」と言っていることになる。そういう非常に難しいというか、私たちの考えではなかなか考えられないようなことが起こっている。

自分の分別が破られて、「いいことも悪いことも、生まれたことも死ぬことも全部仏さまの世界だから、そうだ、それを引き受けて生きて行くしかない」、そう言わざるを得ない。それが親鸞聖人の信心。そうでなければ救われない。

ブラジル移民―すべてを引き受けて生きて行つた人々

今思い出したけど、僕はブラジルに三回行った。よく行つたと思う。昼と夜がまったく逆さまだし、夜の夜中に走り回つて講義しているのですから、帰つてきて四キロくらい痩せていました。それはしんどかった。だけど、今の人は、二世か三世の人たちです。ところがあの二世と三世の人たちは、一世の人たちの生き方を知っているのです。見ているのです。じいちゃん、ばあちゃんすごかったと、えらかったと。一旗揚げようと思つて行つたのです。ところがブラジルでは奴隷と同じように叩かれて使われた。無茶苦茶だったので。ほんとうにひどい目にあつているのです。

ところがその頃は、みんな仏様の世界だったから、今から百年以上前は、家財道具一切持つていっていかないけれども、お内仏だけは

みんな持って行っているのです。それも半端ではない、ものすごく大きなお内仏を持って行っている人もいるのです。そういう人の中にはいたのです。

一世の人たちの声を聞くと、「いろいろあるけれど、引き受けていかんでしょうがないね」というのが口癖だったそうです。みんなそう言っていたそうです。そしてどんな苦しいことも引き受けて、南無阿弥陀仏と言って仏さんに手を合わせて、朝晩、正信偈をあげて、今日はどんなに殴られても、叩かれても、石を投げられても、切れないで帰って来い、と言って、また帰ったら正信偈をあげて「ああ、よかった」と言って、そうやってみんな生きていったのです。

それは人として生きる時には、とても耐えられないことはいっぱいある。だけど「引き受けていくしかしょうがない」と言って、皆さん生きていったらしいです。あれは仏様に目覚めた心でないと行えない。だけど人間としてはしんどかっただろうと思う。

ピンギというサトウキビで作った焼酎がある。ものすごく強い、四十五度か四十八度ある。向こうの人は体が大きいでしょう。黒人などはものすごく大きい。日本人が一番小さい。だから薬局に行つて風邪薬を買つたら、半分以上飲んだらだめだそうです、倒れるそうです。日本人みんな小さいから、ピンギの焼酎、初めて行つた時に、大ジョッキに氷をいっぱい入れて、サトウキビから作つてあるから、砂糖をちよつと入れると丁度あう。グーと飲んだら甘くておいしい。しかし二杯飲んでぶつ倒れました。水割りと思うのですが、ストレートだったのです。こんな大きな大ジョッキでストレートで二杯飲んだらぶつ倒れる。あと戻した、次の日ふらふらしながら出て行って、「ばあちゃん、おれ昨日二杯飲んで戻した、あのピンギというのはひどい酒だなあ」と言つたら、「そうそう、あれ飲

んでみんな死んだ」と言われた。

みんな死んだのです。つまりとても耐えられなかったのではないでしょう。焼酎でも飲まない、こつちで仏様の世界で生きていこうとするときに、引き受けていくしかしょうがないとしか言いようがない。だけど人間的にはとても耐えられなかった、焼酎でも飲まないと堪えられないと思つて、そして飲んだ。そして死んだのです。それで、その時、私はわかつた。「それ飲んで死んだんか」「死んだ、死んだ」と言つた。それを聞いて涙が出てきた。しんどかつたと思う。その中を生きていったのです。

苦しくてつらいときに「南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏」と他力の信心に立つてみれば、「もう帰ることはできない、ここで何とかして生きていこう」と言つてみんな励ましあつて、引き受けて生きていったのだと思います。そういう信心の開く世界、分別では堪えられないけど、信心が開いた世界は仏様の世界なのです。だから、どれだけ苦しくても頑張つていこう、こう言つて生きていった。それがブラジルの人たちだということがよくわかつた。

ピンギでぶつ倒れて、こうだつたと言つた時に、ばあちゃんが「死んだ、死んだ」と言つたから、「しんどかつたやな」と言つたら、「そうや、みんなたまらんかつたや」と言つて、ばあちゃんがニコツと笑うのです。

二世・三世の人たちはそういう人たちを見ています。だから「すごい」、「真宗の門徒さんはえらい」、「すごい」と言う。

キリスト教の熱心な家庭に生まれたブラジル人の黒人のサッカー選手がいて、彼に日本人の友達がいて、真宗のご門徒さんだそうです。そのお父さんが死んだので、真宗の葬式に初めて参つたそうで

す。キリスト教の場合はみんな泣いて亡くなった方を送る。真宗でも泣かないことはないけど、ブラジルは現実がよほどしんどかったのではないでしょう。みんなが、それこそ拍手をせんばかりに「よく頑張つて生きてくれた」「ああよかつた、浄土に生まれて行つた」と言つて送る。それを見てそのブラジルの青年が真宗に回心して、専修学院に来て、今、ブラジルで真宗を広めています。すごいです。その人は僕のところに来ると抱きついて泣くのです。なんかよくわからないがいつも泣いている。

世を超える―相対分別の世界を引き受けて生きてゆく

わかるでしょう。仏様の開く世界に生かされている。それを糧にして何とかこの世界を堪えて生きていく。仏様の本願の大きな広い世界は、渡りがたいこの人生を渡してくれる大きな船だと言っているのです。そうしてどうにもならないこの分別を破つてくれる。身の分別こそ地獄を作っているのだ。これを破つてくれた太陽のような光が、実は私がいいただいた信心の内容なのだ、というようになります。

「竊に、この心を推するに」、「この心」というのは「他力の信心」、それを推測してみると仏様そのものです、ということになります。そこから始まるのです。だから「凡夫である」と謙譲しているだけでなくて、自分のいただいた仏さんの世界を堂々と証明してはばからない。

みなさんは言葉はもう読み覚えているから「竊におもんみれば難思の弘誓は難度海を度する大船・・・」と読んで何とも思っていないかもしれないが、ほんとはここでびつくりしなくてはいけないので

す。どうしてこんな世界があるのか、凡夫の親鸞聖人に開かれたのか、本当はびつくりしなければいけない。そこから始まるのが「総序」です。

一番最初の「竊におもんみれば、難思の弘誓は難度海を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破する恵日なり」そこに親鸞聖人の凡夫のままに救われた思いがこもっている。親鸞聖人はここで『大経』の信心を自分の信心の内容として直接表明していることになりました。そこに初めて相対分別の世界を引き受けて生きてゆく勇氣をいただいた、「世を超える」ということが実現しているのです。ここから始まるのが「総序」です。いいですね。

今言つた「信心が如来そのものである」というような真宗の信心に目覚めるために一番大事なことは「自力」が破られることです。凡夫は「分別」から離れられないでいつも苦しむものである。その苦しみの元が、実はそこ（自力・分別）にあるということをはずきり照らしてくださる智慧に遇う。そこに他の仏教・聖道門とは違つた真宗の信心の特別の質があります。

信心を頂くのは逆謗闡提（救われないもの）

『大経』によつて、世を超えた信心を表明すると、すぐに

「しかればすなわち、浄邦縁熟して、調達、闡世をして逆害を興ぜしむ。浄業機彰れて、釈迦、韋提をして安養を選ばしめたまへり。これすなわち権化の仁、齊しく苦悩の群萌を救済し、世雄の悲、正しく逆謗闡提を恵まんと欲す」

「逆謗闡提を救う」、ここです。逆謗闡提として初めて他力の信心を頂くのです。

そこに浄土真宗の二つめの特徴があります。

一つ目は世を超えた感動を本願としてあらわすのが『大経』です。それから凡夫（自力、分別）では絶対に救われないということ徹底的に教えたのが『観経』です。

『大経』の「世を超える」という信心を表明した親鸞聖人は、すぐに「しかればすなわち浄邦縁熟して」と『観経』を持つて来ます。

参考書などを読むと、『大経』はこんな經典です」とか、『観経』はこんな經典です」と、だからだと書いてあるが、そんなのを読むと何のことかわからない。そんなことは言っていない、親鸞さんが言っているのは、「この世を超えた信心を頂くのは逆謗闡提なのだ」、そこに中心があります。

「逆謗」というのはわかりますか。五逆 誹謗正法、これは浄土教でいう救われないものです。だから第十八願には「五逆誹謗正法を除く」と書かれてある。救われないものを大乘仏教では「一闡提」と言います。『涅槃経』で一闡提という。

「五逆、謗法、闡提」と親鸞は並べていますから、これはどういう意味なのかということをおぼろげに僕はずっと悩んできました。けれども、実は、浄土教で救われないのは五逆、誹謗正法です。大乘仏教全体で、『涅槃経』・『華嚴経』・『法華経』、一切の經典で、救われないのが一闡提です。だから浄土教で救われないものとして、大乘仏教で救われないものとして、初めて他力の信心を頂くのですよ、ということをおぼろげに『観経』を持つてきて言っている、というふうに考えてください。

今日は時間がないので大綱だけにします、もう一回ここをします、

「しかればすなわち浄邦縁熟して、調達、闡世をして逆害を興ぜしむ。浄業機彰れて、釈迦、韋提をして安養を選ばしめたまへり。こ

れすなわち権化の仁、斉しく苦悩の群萌を救済し、世雄の悲。正しく逆謗闡提を恵まんとす」

ここまでが『観経』です。

「かるがゆえに知んぬ園融至徳の嘉号は、悪を転じて徳をなす正知 難信金剛の信樂は、疑いを除き證をえしむ真理なり」

ここまでが『阿弥陀経』です。その次に

「しかれば、凡小修し易き真教、愚鈍往き易き捷徑なり。大聖一代の教、この徳海にしくなし。穢を捨て浄を欣い、行に迷い信に惑い、心昏く識寡なく、悪重く障多きもの、特に如来の発遣を仰ぎ、必ず最勝の直道に帰して、専らこの行に奉え、ただこの信を崇めよ」

ここには『大経』、『観経』、『阿弥陀経』を並べているということになります。昔から学問をする人たちは立派な人たちが多いから、『大経』というのはこういうお経だとか、『観経』というのは王舎城の悲劇をずっと説明している、『阿弥陀経』は名号が大切だということが書いてある、このようなことをずっと説明していくのです。それなんの意味があるか、意味がわからない。

そうじゃなくて、世を超える、「超世の信心」をいただくのは「逆謗闡提」としていただくのだと、逆謗闡提をどうやって救うかというのと、それは「名号として救う」この三つを総序で親鸞聖人は經典を押さえながらきちつとやっている。

阿弥陀如来の別願

これは、今までお話をしましたね。

『大経』の四十八の本願が説かれた後に三誓偈がある。「我建超世願」これです。「超世」その次に「普濟諸貧苦」、その次に「名声超十方」この三つが三誓偈です。これまでここでお話をしたと思います。



『大経』では法蔵菩薩の四十八願が説かれるけれども、説かれた後にもう一度法蔵菩薩が三つの誓いがあげられる。ということは四十八願はこの三つに代表される。

だから「世を超える」、「超世」ということ、これは仏教であれば浄土教でも、聖道門でも全部一緒です。ところが「凡夫による救い」と「名号による救い」は阿弥陀如来しかもっていない「別願」です。

「別願」、ここに阿弥陀如来の特徴がある。「超世」は仏教全体のだから「総願」ですよ、ということは今まで申し上げてきたと思います。

(覚えていない方は帰って、今日お買い上げいただいた本を見てください。書いてあればそういう時に助かる。)

つまり、お釈迦さんは真宗を表すのにこの三つをあげた。だから親鸞聖人も『教行信証』で浄土真宗ということを使う時には、必ずこの三つをちゃんと書いている。今そうですね。『大経』による超世の真実を表明して、そういう信心は逆誘闡提、凡夫として救われる。それは名号によって救われる。たまたま、分かりやすいように『大経』『観経』『阿弥陀経』を介しているけれども、それは『大経』の説明をしたり、『観経』の説明をしたり、阿弥陀経の説明をしているではありません。そうではなくて、他の仏教から選んで浄土真宗の特質、特に大切な質的な違いはこの三つにあります、ということ、この総序で親鸞聖人は、きつちりと、最初に押さえているということです。ここが大切です。

### 「一心帰命」と「一心願生」

もう一つ親鸞聖人が真宗を表すときに必ずお使いになる言葉は「一心帰命」と「一心願生」です。この二つを親鸞聖人はちゃんと使

いながら『教行信証』を展開していきます。それを忘れないように、それは親鸞聖人が編み出した方法ではなくて『大経』がそうになっているのです。愚禿積親鸞というのですから、自分が編み出したとか、特に自分が感動したというのとは違う。『大経』がそうになっているのです。この三つが真宗の特質、大切な優れた資質です。そして前半が「一心帰命」、「ああ弘誓の強縁」から後半、後半が「一心願生」。そういうふうにして親鸞聖人は浄土真宗をきちんと表している。それが総序全体の構造になっています。

間違いないと思います。なぜなら私がそう思うのではなく、『大経』がそうになっているからです。

この次は、前半はこの続きをもう少し説明して、後半は願生のところに入っていくって、総序が終わればいいなと思っています。

短い時間ですので言い足りなかったこともたくさんありますが、ここで講義を終わらせていただきます。質問時間でお聞きいただければありがたいです。

## 《質問》

(質問一)

「確認させていただきたいのですが、総序の中で『大経』『観経』『小経』が並べられている、その『大経』『観経』『小経』の三つと、「超世」と「凡夫の救い」と「名声十方」とは対応しているということですか」

(先生)

もちろんです。もう少し言うと、

『大経』は第十八願に対応している。

『観経』は第十九願・自力ですから、修諸功德の願と対応している。

『阿弥陀経』は他力に帰したとしても身が自力だから第二十願と対応している。

そして往生という所から言うと、

『大経』は難思議往生と言う。

『観経』は双樹林下往生と言う。

『阿弥陀経』は難思議往生の「議」を一つ取って、難思議往生と言う。だから、

『大経』『観経』『阿弥陀経』の三経、

「難思議往生」「双樹林下往生」「難思議往生」の三往生、それから

「十八願の機」

「十九願の自力の機」

「二十願の他力に帰しても自力が消えないと言う機」

「三機・三願・三往生」というのは試験に出るから覚えておきなさい。

「三機・三往生」ということは、表では言っていないが背景にある。第十八願の超世、十八願に帰するには、唯除五逆誹謗正法の自覚が必要。これは十九願の『観経』に表されている。だから『大経』の後にすぐ『観経』が出てくる。そして、名号一つで救われるのが『阿弥陀経』です。ありがたいことです。

しかし、総序だから「三経」しか表に出していない。けれども、親鸞聖人の心持ちでは「三往生・三機」ということがちゃんと押さえられている。

十八願の超世は五逆誹謗正法・凡夫としてしか受けることができない。そこをちゃんと押さえないと親鸞聖人が何を言っているかわからなくなる。参考書を読んでもわかりません、参考書は「物を知っている」と自慢をしているだけです。「救われるか、救われないか」それが問題です。そこを親鸞さんがどう言っているかというのを聞く、これが大切だと思います。

君の質問はいい質問です。

三願転入は十八願・十九願・二十願と出てくる。しかしあれは難思議往生、双樹林下往生、難思議往生と往生を展開している。それからもうひとつは『三経往生文類』を読みなさい。そこに『大経』は難思議往生、『観経』は双樹林下往生、『阿弥陀経』は難思議往生と、ちゃんと書いてある。『三経往生文類』をきちんと読むと書いてある。

すいません、僕の学生でしたのでちよつときつく言いました。若

いからまだ立ちなおれます。皆さんは立ちなおれません。今、言つたように総序ですから、表面できちつと押さえておかなくてはいけない。しかし親鸞聖人は奥が深いです。きちつとおさえるから実に奥が深い。今言つたようなことを知っていると、すごいことを言っているなあということが分かるから……。

### (質問二)

「さつき先生が途中でおつしやつた三一問答のことも伺いたいのですが、今日は、「南無阿弥陀仏が信心として実現する」というのは延塚先生らしい言い方ですが、南無阿弥陀仏というのは、例えば『観経』の上品上生のところと下品下生のところに「称南無阿弥陀仏」と出てくる。「南無阿弥陀仏が南妙法蓮華経、南無大師遍照金剛とちがうのは、人間が考えた言葉でなくて、お経に仏説として出て来るのです」と田畑先生から教わりました。その南無阿弥陀仏が信心として実現するとよく言うでしょう、さつき言われた「阿弥陀さんがもう一人どこかにおつて阿弥陀さんに救われる」とか「南無阿弥陀仏と念仏称えたら念仏に救われる」とかいうような。感覚的な人はこんな疑問を持たないと思うのですが、僕は南無阿弥陀仏というのは、田畑先生から「お経の言葉」と教わった上でも、ただの言葉だと思うのですが…、

これらが質問ですが、延塚先生と私は普段、割と親しく車とかで一緒にお話をするところがあるのですが、一番意外なのが、さつき言われた「南無阿弥陀仏が信心として実現する」とか、「南無阿弥陀仏に功德がある」とか、「本願に大きな功德がある」とか、まじめな顔をして言われることです。

僕がこんな質問をすると、延塚先生は「俺でも西藤でも死ぬとき

にはわかる」と言われたのです。それを言われたら、僕は『観経』の南無阿弥陀仏をだつたら、僕でも死ぬときに「詰まらんことに今まで一生懸命になつていたな」と思うだろう、と分かるのです。ですが、今、先生は「南無阿弥陀仏が信心として実現するのは死ぬときでなくて今」、「今わかるのが信心だ」とさらつと言われたのですが、もうちよつと「南無阿弥陀仏の功德」とか、「本願の功德」とかを説明していただきたい。

### (先生)

なかなか難しいな、解説したり説明したりするときには「南無阿弥陀仏にはこんなはたらきがありますよ」とか、「こんな功德がありますよ」と解説をしたり、説明をしたりするしかしようがない。けれど「信心の事実」というのは、先生に会ったとき、例えば『歎異抄』ですと、「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」念仏して弥陀の本願に救われなさい、こう言っているのです。

そうすると念仏は「行」、弥陀の本願に救われたというのは「信」、「行・信」という形になっている。普通なら彼が言っているように、「阿弥陀さんを信じて、信じた者が念仏する。だから「信・行」になる。「教↓信↓行↓証」これが分別の形です。ところが親鸞聖人は「教↓行↓信↓証」、「行」が先です。「行」というのは「振る舞い」。これは先生に遇ったときに、わけがわからないが五体頭地が先、気が付いたら念仏を言っている。これが先。後でよく考えたら、あの時「本願に救われていたのだ」と言うふうになる。

だから念仏の方が先だから、信心は念仏として実現する。南無阿弥陀仏として信心が発起する。それが事実だと思ふから、そういう

言い方をします。だけど普通の常識ではなかなかわかりにくいかもしれない。言おうとしていることはわかりますね。念仏しかないのです。信心は大事だけれど、『教行信証』を読むと、信の巻に信心が特別にあるように書いてある。信心は大事なのですが、あるのは南無阿弥陀仏しかない。念仏しかないのです。

信心と言っても南無阿弥陀仏として信心は湧き上がる、だから「難思の弘誓は難度海を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破する恵日なり」十分に湧き上がってきた念仏のはたらきを言っている。そんなふうに本願は事実としては南無阿弥陀仏として実現する、それを本願の成就といいます。だって第十八願は、「ただ念仏せよ」と書いてある。だから本願が本願として実現するのは、本願が私たちの上に実現した時には南無阿弥陀仏として実現する以外にあり得ないのです。

皆さんご存知かもしれませんが、あの高史明先生が、息子さんが亡くなって、奥さんがちよつと神経衰弱になって、本人も神経衰弱になって、「もう、死んだ息子のことを思って、親としてはあととは供養してやるしかない」と思った時に、『歎異抄』の「親鸞は父母の孝養のためとて念仏申したること一度もない」という言葉を思い出し『歎異抄』を読んだと言われる。これは実際に聞きました。

そうしたら、今まで、自分の分別の方が先にたつて、「分別こそ俺だ」と思ってきたけれども、そうではなくて、どかんと、いのちの方が「南無阿弥陀仏」と名乗り出てきた。「俺は泣きながら、気が付いたら、原稿用紙に南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏とずっと書いていた」そうです。念仏が先、念仏しかないのです。信心なんて考えたらあのように思うけれども、南無阿弥陀仏の起こる心、これを信心とい

うのです。だから本願は念仏として実現する。南無阿弥陀仏として実現する。これが事実です。それを「行信」というのです。

### (質問三)

「最近の自分の中の思いなのですが、コロナのことがいろいろ取りざたされるようになって、仕事柄、高齢者の方のところしか行かないので、罹るの怖いので、気づいたら世間の真ん中に自分がいるなということがすごい分かられます。そこに気づけば、かえって救われようと、かえって救われないものだという声が聞こえてくるように思われます。仕事を含めて、先ほどのわが身を置いている、そこでしか生きていけないというところも、改めて気づかれます。こんな中でこんな生き方しかできないけれど、それが自分なのだと改めて気づかされた感じですか。かえって仏教を思わされた感じですか。」

### (先生)

そうですね。その通りです。世間ではできる人が立派で、できない人はだめだとか、なんか日の当たるところがあつて、私は日陰だとかいろいろ考えます。仏法に会った人は、会ったところが主人です。浄土に生まれれば生まれた人が主体です。浄土には窓際はない、際はない。際があると窓際族ができるから。だから生まれた人、それぞれが主体、随所に主となる。松原先生が僕が結婚した時に書いてくれたのです。「随所に主となる」、僕は嫁さんに負けるなど思ってきたが、どうもそうではない。仏法は、あるところが自分の場所、そこに命を捨てていく。そういう浄土。だから生まれた人が主、主従と窓際というのではないのです。生まれた人は全部主体に

なるのです。それが仏法に恵まれた人の功德です。そうだと思います。

(質問四)

「回心のときに、自力無効という話があつて、学びとして、まず、頭で「自力無効ということが必要だ」と。だけど本当に実際の意味で自力無効を知らされるにはギャップがあるではないですか。下手をすると、自力無効ということが目的化してしまうということもある。自分はまだ若い部類に入るかもしれないませんが、まだ全然苦勞も足りずに、まだまだこれから苦勞もしなくてはいけないのかなと思いつつですけれども。その辺で本当に自力無効を知ることについて教えてください。」

(先生)

君が言うように大谷派のくせ、自力無効が目標になつて、そして自力無効でなければならぬ、というわけです。暗いのです、本当の自力無効というのは明るいのです。

専修学院に変な奴がいて、お西の住職です。まじめな人です。聴講で来ているのです。終わったら君と同じで、いつもぼくに引つ付けて回るので。それでなんやかんや言うのですが、要約すると「自力無効というのは」、そればかり言うのです。本人は、そして暗い顔をしているのです。「自力無効と言っているのに、僕が救われたいのはなんででしょうか」と言うわけです。それは君が言うように自力無効というのが本当にわかつていない、理解はしている。

いいですか、「無碍の光明は無量の闇を破する恵日なり」自力無効は仏様の智慧が決めることです。先生の言葉で決定されることで

す。具体的に言うと、自分で自分のことを自力無効だと思つたら、いつまでたつて自力無効にならない。思っているのが自力だから。それは暗くなるだけの話。そんなだつたら、「わー」と喜ぶ方がいい。まじめに自力無効と考えて暗くなるくらいなら酒を飲んで騒ぐ方がまだましでしょう、と思いません、同じだから。

そうではなくて、自力無効を決めるのは仏様の智慧の方、向こうが決めるのです。自分が決めるのではないのです。具体的にいうと、先生から言われた言葉は「もう生涯その通りです」と言つて決まつてしまう。自分の方で決めようとする自力無効と思う時もあるけれども、思わないときもある。そうして「思わなくては」と思つて、なおさら暗くなる。ところが向こうから決められたことは、これはどう考えても決まつてしまう。

だから先生に会つたときに、先生の言葉は「ただ、念仏して弥陀にたすけられなさい」その時に、たぶん親鸞の頭の中を巡つたことは、21「この人は、何を言っているのだろう、これまでは自分のことを救おうと思つて頑張つてきたのに、念仏によつて救われなさい」といわれたら、「何を言っているのか」と、まったく方向が違う。「ああ、今まで、自分で自分を救おうと思つてきた、それは夢だつたの」と言つて破れる。そうですね、『歎異抄』にそうなつている。

それは先生が決めること、向こうが決めること、仏さんの智慧が決めること、自分で自分のことを決めるのとは違う。そこだけをはつきりしておく。いいですか、

(質問五)

「先生の本に「自力の心」というのは、自分ではわからない、自分でやぶれることはない」と書いてありましたが、今、先生がおっしゃった

ところの部分ですね。それはよき師とかよき友とか、そこに人格的にもものを通しながらいただくという形になるのですね。」

(先生)

そうですね、自力無効ということをおもわぬこともないです。皆さん大病して入院して、これまで自分の力で生きてきたと思っていたけれども、それは夢だった、自力だけではどうにもならんとか、水害などで全部流されたら、一人ぼっちになったら「ああ大自然の前にはだめだ」という。自力無効ということが分らんことはない。しかしこれは自分で決めている。自分のことがそう分かる。

ところが仏教の自力無効というのは違うのです。向こうが決めるのです。だから田畑先生がおしやるように、先生に遇った時の一言、これがじかつと突き刺さって、もう動かしようがない、その通りです。それが一生続く。「そのとおりです」というのが広く言えば凡夫の自覚、機の自覚です。

いろんな場合、やはり人だと思ふ。私は自分の先生にそういう感じを持つている。先に言ったように高史明さんと初めて会った時、二人で飲んでつぶれたのですが、その時に私は帰って眠られなかった。徹底的に自分の愚かさを突き付けられたと思つて、あの人は偉い人だと思つて。次に会った時に「先生、この前は先生に怒られて眠れませんでした」と言ったら、「なにをおしやつておられますか、私が先生を怒ったりしますか」と言つて、本人はけろつとして居るのです。

言つた言葉は僕に突き刺さっているのです。それが全部、広く言えば、自力無効ということをおしやっています。向こうが教える、先生に会うということはそういうことです。そういうことがなければ

ば本願の世界に目が開けないのです。

(質問六)

「先生の御著書で「奉讃教行信証」という本を読ませていただきました。あとがぎのところ「これから仏教界は未曾有の困難な時代を迎えるであろう」と書かれています。また、それに対してどのように立ち向かえばいいのかという先生の熱い思いを述べられています。もう少し具体的に「未曾有の困難」というところをお話いただければと思います。」

(先生)

それはご門徒さんも方はどうかわかりませんが、お寺の方は、「コロナで今年の盆参りは来なくていい」というところが多くあったらいい。それはまあそうでしょう。葬式もみんなが集まってやっていきましたが、「家族葬にしましたから、簡単にします、お寺さん来てください」と言うところはまだいい。「来なくていい、うちで葬儀しました」というのもある。だんだん「寺はもういらん」という話が出てきて、これから先お寺さんは困るでしょうね。

しかしこれは僕らの怠慢だと思う。今まで本當のことを言つて、本當のことで助かるように言つてきていない。その付けが回つてきているのです。だからこれからそういう時代が来ると思っています。

今まではおじいちゃん、おばあちゃんが大事にしていたお寺だから、なんとか、かんとかと、お寺さんが「寄付してくれ」と言ったら、まあお寺の事だから出さなくては、となつていたが、だんだんそれがなくなつてくる。

この辺はまだいいです。金沢に行つてごらん。小松六坊と言つて

ものすごい大きなお寺あるでしょう。ああいう寺は何度も燃えています。燃えたときに地方の人は自分の財産を全部出して建て替えたというのです。息子が大学に行くために貯めていた金の全部出して建て替えたというわけです。だけど、これから先、そんなことはないでしょう。そうしたら、もう燃えたら建て替えられない。そういうふうには、これからだんだん寺離れが進んでいく。これがこれからの現状だと思います。その中でどうしていくか。

それは皆さん一人一人、いろんな努力があるでしょう。しかし、一言で言えば、蓮如さんが「信をとれ、信心に生きる人が一人でも生まれたら」と言った通りではないですか、そのために命を尽くす。そこに命を懸けなかったらどうにならない。いろんな方策はあるでしょう。音楽をやって人を集めてもいい。落語をやって人を集めてもいい。ボランティアをやって人を助けてもいい。だけど、信心がなかったら何の意味もない。そんなことはしなくてもいい。しなくてもいいとは言わないが、することは人間として当たり前のことで、そんなことは活動にはならない。それを通して、人はどうやって生きて、どうやって死ぬか、そこを何とかして伝えていくしか道は残されていない。というふうに私は思います。

#### 恩徳讃

「如来大悲の恩徳は、身を粉しても報ずべし、

師主知識の恩徳も骨を砕きても謝すべし」南無阿弥陀仏

文責は編集者の田畑正久にあります。